

教 仁 名 聞

第68号
(発行日)
2016年5月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

生き足りる人生

人の生活は、「もの足りた」「満足したい」という欲求で生きていくといえましょう。

一生の間、もの足りようとして、あれこれ求めまわっています。そして、知らぬ間に老いてゆき、人生の時間切れとなってしまう。ところが人生の幕切れ近くになってもいつまでももの足りませんから、「まだまだ生き足りない」「まだ死ぬのはご免だ」ということになりましょう。いわば、死にたくないばかりの思いの中で生を終わっていきることになりかねません。

私たちは何によっても足りるようになるのでしょうか。この事で、てっとりばやく自分を満たしてくれるのはお金であり、お金にゆとりがあるのは満足度を高めるとはいえましょう。しかし、裕福であり、娯楽がたくさんあって気楽でも、心の底には、何か知らないけれども、根本的な餓えという欲求不満が残るように思います。

趣味や娯楽などで一応慰まられますが、人間の心は自分が考えているほど浅いものではなく、どうしても根本的な「もの足りなさ」が残ります。

また、趣味や道楽だけではダメだと思つて、ボランティアなど人の役に立つことをすることでお金では買えない充実をえようとすることもあります。それも結構でしょう。確かに生きがいになると思います。

ただ、人間の心というかいのちには、私の個人的な願望をこえた、無限の願望があります。それは、「真実にあいたい」とか「はかりないのちを得たい」というような、無限への欲求があると思います。近世の著名な仏教者であった清沢満之師はそういう欲求を「人心の至奥より出ずる至盛の要求」といつています。そういういわば宗教心が人の心の底にあると思います。その欲求はお金とか健康とか娯楽とか慈善行為などによっては、満たさ

れない欲求です。

この欲求はだれにでもあり、しかも根本的であつて、自分でおさえることも消すこともできない願いです。このような願いは、それがあつながら自分自身になかなか自覚されないものです。

この欲求が満たされないから、どこか人はいのちの芯のところで「もの足りなさ」や「やりきれなさ」を感じ、それは、いつまで生きても「生き足りない」という思いとなつて残ります。そういう人生を金子大栄師は「不完全燃焼の人生」といつています。

人間のいのちのかぎりない願望に込めてあるもの、それがはかりないいのちと光であるアミダ仏でありましょう。無限の願いは無限(アミダ仏)なるよき働きによつてしか充足しないと思います。

このことで宗祖親鸞聖人のご和讃に

「本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功德の宝海みちみちて
煩惱の濁水へだてなし」

というのがあります。本願力という阿弥陀仏の大慈大悲のはたらきにあえば、その人は一生を空しく過ぎることはな

く、功德で満たされると仰せられています。

そういう限りないよき働きのことを古来より仏様とか神様とか申しますが、真実の仏、真実の神にであうこと、それを古今東西の人びとが求めてきた歴史があり、それで今日までも宗教が続いてきたのだと思います。

一生がただ何となく過ぎて、いつの間にかもの足りないまま、生き足りないまままで空しく過ぎてしまう、しかしながら、まことの仏(アミダ仏)にであうと、それによつて、人生に「充分に生きて」「生きたりないということはない」「生きた」と感じるでありましょう。そこにいつまで生きていてもいいが、いつ死んでもいいといえるものがあります。

「まだまだもの足りない、まだ生き足りない」という思いだけでは、死を受けいれることはなかなか難しいと思います。生き足りておればこそ、本当に死んでいけるのであります。

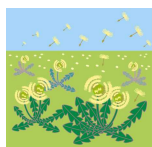
本当に死んでいけるということは、死なないのち、いわばアミダ仏に触れていえることでありましょう。

本願力にあうというのは、南無阿弥陀仏をいただくという事です。阿弥陀仏の大慈大悲のお心にあうという事です。

お念仏を申し、お念仏を聞く、そこにすでに阿弥陀仏にあっているのです。というのは本願力は私たちの方からおうとする前に、私たちにあいに来て下さっているのです。その徴（しるし）であり、その現れが南無阿弥陀仏のお念仏の声です。南無阿弥陀仏となつて喚びかけていて下さるのです。今ここでだれでも南無阿弥陀仏を称え聞くとそこにあえるようになっていくのです。ただお念仏がそういう阿弥陀仏のお出ましであることをよく聞かないから知られないし、あえないのです。

木村無相さんは
「一声一声
如来のお出まし
一声 一声
浄土真宗」
と詠っておられます。

(了)



十方諸有の衆生は

(和讃問答)

十方諸有の衆生は

阿弥陀至徳の御名をきき

眞実信心いたりなば

おおきに所聞を慶喜せん

「浄土和讃」

現代語訳（十方世界の、迷いを繰り返してきた衆生が、一切衆生を仏になしたもう無上の功德である南無阿弥陀仏の名号を聞いて、眞実の信心が凡夫の心に届くなら、「ああ有り難い」と、お聞かせ下さる阿弥陀仏の大悲を大いに喜ぶであろう。）

* * *

N 「十方諸有の衆生という十方とは東・西・南・北・南西・北西・南東・北東・上・下のあらゆる方角のあらゆる世界とお聞きしています。そこにいる衆生が十方衆生ということだと思いますが、諸有とはどういう意味ですか」
D 「諸有とはもろもろの迷いの存在、それをくりかえしてきた者、それが諸有の衆生で

す。私たちは今人間という存在（形式）ですが、人間としてこの世に生まれる前に、さまざまな存在（形式）として

流転してきたのである、と仏様のおん眼によつて見られた私たちの姿が（諸有）ということと教えられています」

N 「生死流転ということでは私たちはさまざまな存在の形をくりかえしながら、生まれて死ぬことをくりかえしてきたのですね」

D 「ええそうお聞きしています。六道あるいは六道輪廻などど説かれ、地獄道・餓鬼道・畜生道・人間道・天道など五つ乃至六つ（修羅道を除く）の生存をくりかえしてきた今の私なのだよ、と教えられています」

N 「それほど、私たちの存在は底が深く、迷いは根深いのですね」
D 「ええ、死んだぐらいで解決がつかないのが、迷える自己存在なのです。人間という姿は、自己が取った姿の一つだといえます」

N 「では（阿弥陀至徳の御名）とは」

D 「そのような諸有の衆生を仏にしたいと如来法藏様が本願を起こされ、迷いの元を断つて仏にならしめんがため、私たち一人ひとりを仏にならしめたもうご修行をして下さつてできあがつた功德、それが至徳の御名です。それを私たちに聞かせ、信受せしめて私たちに与えて下さるのです」

N 「至徳の名号とは、阿弥陀如来様が法藏菩薩として修行し、ご苦勞下さつた功德の全てがこめられている南無阿弥陀仏の御名ということですね」
D 「ええそうです。一切衆生を平等に仏になしたもう無上の功德（至徳）が名号に具わっているとお聞かせいただいています」

N 「南無阿弥陀仏という名号に、なぜそのような限りない尊い功德が具わっているのですか」
D 「それは私にも分かりません。ただこういえるのではな

いでしょうか。南無阿弥陀仏を信じた人は不思議なことに阿弥陀仏と離れない身となります。いわば無限なるものがある有限な私と一つになるという経験をします。南無阿弥陀仏

という言葉によつて阿弥陀仏と心が通いあい、阿弥陀仏がその人の主体となります。そういう経験をした人は沢山います。そうすると南無阿弥陀仏は単なる普通の言葉ではなくて、無限なる阿弥陀仏そのものであるといわざるをえなくなりません。南無阿弥陀仏という眞実の言葉によつて阿弥陀仏そのものにであうという経験を、南無阿弥陀仏と阿弥陀仏とは一つといえます。ですから、阿弥陀仏の全ての徳が南無阿弥陀仏にこもっているといえるのではないでしようか」

N 「そういう経験をされたお方が沢山おられたのですね」

D 「ええ、そうです。お釈迦様はお悟りの経験によつて、南無阿弥陀仏の名号は阿弥陀仏そのものであると知られて浄土の經典をお説きになつたのでありましよう。その教えにふれて、多くの方々が、南無阿弥陀仏は阿弥陀仏そのものであり無量の功德がこもっているという経験をされたのでありましよう。その代表的なお方が七高僧であり、宗祖親鸞聖人です。そしてそういう高僧のご教化によつて、多くの名もなき念仏者が、南無阿弥陀仏という至上のお徳を

いただかれた、そういう歴史が続いてきたのです」

N 「南無阿弥陀仏のなかに阿弥陀仏のお徳が全てこもっているのですね。では、法蔵菩薩が一切衆生を助けたいと願われてご修行し、一切衆生を仏にするお徳を成就して与えて下さるといふこと、そういうことをお釈迦様が説いて下さったことですが、そこをもう少しお話し下さい」

D 「真実ありのままを真如と申します。真如は真実そのものであり、万徳が具わっていると言われています。しかし、私たち衆生は迷いが深く、その真実を知ることがお徳をいただくこともできず、流転してきました。法蔵菩薩は、そういう衆生を助けようと立ち上がり真如に具足している功徳を磨き顕し、それを衆生の成仏の正因として、一切衆生に与えようと願を起こし長き苦勞のご修行をされました。そしてそれを成就して私たちに南無阿弥陀仏を成仏の因として与えて下さっている、とお聞きしています。そのことを大無量寿經の言葉でいえば〈為衆開法蔵 広施功德宝〉

で、法蔵菩薩は、衆（生）のために法蔵を開きて、広く功

徳の宝を施さん、と仰せられています。金の鉱脈（法蔵）から金（功德宝）を取り出して精製し与えて下さる（広施）ように、功徳の宝を南無阿弥陀仏として私たちに施して下さるのでありますよう」

N 「では至徳の（御名を聞く）とは、どういうことですか」
D 「私たちを（今のこのままなりで引き受け、仏になしたもう）無上のお徳を成就し南無阿弥陀仏として喚びかけておられる、その喚び声が南無阿弥陀仏の御名です。その御名を聞くのです」

N 「どのように喚びかけて下さっているのですか」
D 「（汝を仏にする、助ける、引き受ける）と喚びづめに喚んで下さっているのです」

N 「（そのままなりで助ける、仏にする）とまで喚んで下さっている阿弥陀仏の喚び声は私には聞こえませんが」
D 「私たちに（助ける）と喚んで下さっておられても、なかなかすぐには分かりませんね。そこで諸仏善知識は、まず南無阿弥陀仏の御名を称えなさい、お念仏申せと、お念仏をお勧め下さいます。先日

も、あるご婦人が（私は南無阿弥陀仏という仏様の声が聞

こえませんが）とおっしゃるの、（南無阿弥陀仏と称えることは今できませんね。じゃあ、南無阿弥陀仏と称えてみて下さい）と申し上げました」
N 「南無阿弥陀仏と称えることは直ぐできませんね。それでどうなんでしょうか」
D 「称えるとナムアマミダブツと耳に聞こえるでしょう」

N 「はい」
D 「耳に聞こえるナムアマミダブツの音声は、阿弥陀仏が（ここにいて、汝を助ける、引き受ける）と喚んで下さるお声なのです」

N 「称えて、たしかに耳にナムアマミダブツという音声は聞こえますが、阿弥陀仏の喚び声とは思えません。自分の称えている声としか聞こえませんか」

D 「確かに口から出て下さるお念仏は私の声ですが、この声は私の声であると共に阿弥陀仏の喚び声なのです」
N 「そういわれても、お念仏の音が（ここにいて、助からぬ汝を助ける）の仏のお声とは聞こえませんか」

D 「仏のお声を聞くといつても、何か特殊な音が聞こえるのではありません。人の口から出る人の声ですが、この声を通して阿弥陀仏の大悲のお

心を感じられる、仏の喚び声のごとく感じられるといったほうがいいかもしれません」
N 「お念仏の音が耳に聞こえる、その声は人間の声の外にはないといえるけど、この声が耳に聞こえるところに阿弥陀仏のましますこと、助けたもうお心を感じられるといわれるのですね」

D 「ええそうです」
N 「ではなぜ、私にはそのように感じられないのでしょうか」

D 「それは、自分が阿弥陀仏に助けられ、まるまる引き受けていたただかなくては助からない存在ということ、もう一つ言えはいのちの芯のところ、がまったく空虚で死人に等しい者、どうしてみようもない身であるということが知られていないからです」

N 「自分が助からぬ存在であることが自分に知られていないから、阿弥陀仏の大悲がお念仏に感じられないのですね」
D 「ええそうです」

N 「助けていたただかなくては助からぬ存在であるということですが、私はそもそもどういふ存在なのでしょう」
D 「それは私たちの知識では知れません。生と死の根源を

悟りきられた仏様の智慧である仏の御言葉によって教えられないと分かりません」
N 「仏様は私を助からぬ存在と見ておられるのですね」
D 「ええそうです」

N 「では助からぬ存在とは」
D 「罪悪生死しやうじの凡夫ぼんぷのことです。しかもそれをどうすることもできない存在、それが助からぬ凡夫の存在ということ

です」
N 「罪悪生死しやうじの凡夫とは」
D 「分ぶんかりやすくするために、罪悪と生死とを分けてみたいと思います。まず罪悪とは、無明の迷いによって、罪悪に染まっている存在、その代表的な罪悪は貪瞋きんしんの煩惱ぼんごうという我執我愛の心と憍慢きやうまん疑惑ぎやくという真理に反逆する心です」

N 「では生死とは」
D 「生まれて死ぬをくりかえして、そこから出られないという問題です。それは私にとつて、死なねばならないけど死んでどうなるのかという問題でもありません。行く末が無窮の闇におおわれているという問題です」

N 「これが助からぬ私の姿ですね」
D 「ええそうです。その罪悪生死をかかえている私

が、その罪悪生死の問題を自分でどうすることもできない、ということですよ」

N 「人生の根本問題として罪悪生死の問題がたとえあっても、それを自分で解決できるのなら、助からぬ存在とまではいえないけれども、その問題を抱えていながらそれをどうすることもできない。それで助からぬ者といわれるのですね」

D 「ええそうです」

N 「にもかかわらず、一般にはそんな問題についてあまり悩んでいるにはみえませんが」

D 「自分の身体に重病をかかえていても、重病であるとは知らないことがあるかもしれません。しかし、肉体の病気なら痛みが起こってやがて自覚されてきます。しかし、心の重病は気がつかなくても生活はできますから、それに気がつかないことが多いのです。気がつかないから、いつまでも治癒されないままです。たとえ人間生活を楽しんでいるようでも、心の底にこの問題に根差した憂苦や不安がへばりついています」

N 「では、阿弥陀至徳の御名をきき 眞実信心いたりなば」

とおっしゃっています、これはどういう意味ですか」

D 「お念仏を申し、お念仏を聞く、そのことにおいて、南無阿弥陀仏のお助けを信じる眞実の信心が私の心に至り届いて下さる、との仰せです」

N 「南無阿弥陀仏を聞けば、スグに信心が届いて下さるのですか」

D 「そういう可能性はありますが、実際にはなかなかすぐには届きませんね」

N 「なぜですか」

D 「阿弥陀仏は衆生を喚びづめに喚んで下さり、私の口にまで称え現れて耳に聞こえるまでに喚んでおられるのですが、私たちの邪見傲慢のゆえになかなか、今ここにすでに来て下さっている南無阿弥陀仏のお助けに気がつかないのです。気がつくのを信心といえましょう」

N 「聞かされていながら信じられなくしている邪見傲慢とは」

D 「私たちは、自分の考えで自分は大丈夫、自分の生き方で大丈夫と、自分をたのみにしている、そういう自己信頼の心のことです」

N 「自分の知性と行いで、自分を支えられるという自己過

信のことなのですね」

D 「ええそうです。阿弥陀仏のお助けを必要と思っていない、いわば助けられなければならぬ我が身、阿弥陀仏に引き受けてもらわなければ未来ではない、今が生きられないという危機的な私、そういう助からぬ自分が知られていないから、阿弥陀仏が（そのままなりで助ける）と喚びづめに喚んで下さっても、それを何とも思わないのです」

N 「そういうような私に眞実信心が至るとは？」

D 「（汝を引き受ける）との南無阿弥陀仏のお心を聞かせていただく、そこに南無阿弥陀仏にこもっている大悲のお心が不思議にも私の心に至り届いて私の信心となつて下さるのです」

N 「そうすると、（おおきに所聞を慶喜せん）となるのですね」

D 「ええ、阿弥陀仏のお慈悲を聞かせていただく（ああ有り難い）とおおいに喜ばざるをえないのです。人生における最高の（喜び）です。所聞とはお聞かせいただいた阿弥陀仏のお助けのことです」

N 「それがなぜ最高の喜びですか」

D 「阿弥陀仏に撰め取られた喜びは、眞実にふれた、しかもこわれない喜びですから」

(了)



〈遠方法話予定〉

*五月四日。姫路市。西源寺。午後。

*五月十九日～二十一日。福井別院。

朝事後法話と午後法話・座談

*五月二十三日。名古屋別院。

午前十時法話・午後座談。

*六月四日。福井別院。

午前十時法話・午後座談

*七月九日。福井別院。

午前十時法話・午後座談。

*七月十四日～十五日。石川県鳳珠郡穴水町。

法琳寺。午後より午後まで。

*九月四日。岩手県釜石市。寶樹寺。

午前十時より正午まで。

*九月十日。福井別院。

午前十時法話・午後座談

*十月十三日～十五日。福井別院

朝事後法話と午後法話・座談

宿泊可（☎〇七七六・二一・四四四四）

*十月十九日。名古屋市中川区。坪井氏宅

午前十時法話・午後座談

*十月二十三日～二十五日。札幌別院。

*十一月二十三日から二十四日。石川県金沢市。名聲寺。午後から午後まで。

○詳しくは念仏寺にお尋ね下さい。

《住職雑感》

*四月二日。大谷大学同期（昭和四十二年卒）会が初めて行われ、半世紀ぶりに二十数名の同期の人に大谷大学でお会いした。女性は三人ほどで、三十人ほどが物故者となり、追悼がなされた。大学時代は人との交わりが少なかった私には、数名の知人の外は初めて会うような人たちであった。それでも同じ大谷派教団に属している人が多いので、語られる話の内容は同じ関心領域であったから退屈はしなかった。同期のお互いは老体となった。老体は障りが多く、自分の身体を安寧にするだけでも容易ではない。老苦を日々感じるが、また老苦の身なればこそ、死を受容する心も起こりやすいといえる。逆に余り元気だと死ぬことへの抵抗はおおきいともいえようか。ならば、老苦も浄土を憶念する縁になろう。生まれさせて下さる光明無量のお浄土はどのような領域なのであろうか。そう思うてみても想像をこえている。この人間世界も実に不思議な世界であるが、浄土もまったく不思議な世界であろう。ただ娑婆は苦しみの多い世界であるが、浄土は《もろもろの苦あることなし、ただもろもろの樂を受く》との阿弥陀経の仏語が有り難い。